

海外映像コンテンツの接触度と国際理解に関する日韓比較研究

A Comparative Study of International Understanding and Watching Video Contents between Japan and Korea

鄭 晴仁, 野崎浩成

QINGREN ZHENG, Hironari NOZAKI

愛知教育大学大学院教育学研究科・発達教育科学専攻・情報教育領域

Graduate School of Education, Aichi University of Education

あらまし: 日本と韓国の大学生を対象に海外映像コンテンツの接触度が国際理解やソーシャルディスタンス(外国人への社会的距離), グローバル化への態度にどのような影響を及ぼしているのかを分析した。その結果、日韓両国ともに海外映像コンテンツの接触度の高群は低群より国際理解の程度が高いが、ソーシャルディスタンスやグローバル化への態度の得点には高群と低群の間で有意差は見られなかった。

キーワード: 海外映像コンテンツ, 国際理解測定尺度, ソーシャルディスタンス(外国人への社会的距離), グローバル化への態度

1. はじめに

インターネットが世界中に普及するによって、異文化間の交流が増大している。それに伴い国際理解と繋がりが海外映像コンテンツの接触も容易になった。そこで、本研究では、海外映像コンテンツの接触度に着目した調査を行うこととした。

2. 研究目的と調査の方法

2.1 本研究の目的

日本と韓国の大学生を対象にして、海外映像コンテンツの接触度が国際理解に及ぼす影響について検討する。その上で、海外映像コンテンツの接触度がグローバル化の態度や外国人への社会的距離(ソーシャルディスタンス)にどのように影響を及ぼしているのを明らかにする。

2.2 調査対象者と調査の方法

本研究では、2014年7月に日本のA大学の大学生102名と2014年9月に韓国のJ大学で253名の大学生を対象にして調査を行った。そのうちの有効回答数は355であった。次節で述べる質問紙を授業開始前に配布し、その場で記入、回収するという形で調査を行った。

3. 調査で用いた質問紙の内容

3.1 海外映像コンテンツの接触度

本研究では、外国映像コンテンツとして「外国のドラマ、映画、ミュージック・ビデオ」の3つを調査対象とした。その理由はこれらの3つは情報商品の中でもメディアで注目を集まっているからである。調査対象にはこれらの3つのメディアの接触度を訪ねた。接触度を4件法で答えて貰った。12点満点で、得点が高いほど接触度が高いとする。

3.2 国際理解の程度の調査

国際理解の程度を調べる尺度は「国際理解測定尺度: IUS2000」(鈴木ほか, 2000)を利用する。「国際理解測定尺度(IUS2000)の作成および信頼性・妥当性の検討」(鈴木、坂本ほか, 2000)の調査結果の中で因果係数の推定値が0.5以下の27質問項目を削除した。また、質問の中で、国際理解測定尺度の質問とグローバル化への態度の質問が重なっている11質問項目を削除した。その結果、国際理解測定尺度として人権の尊重(10項目)、他国文化への理解(8項目)、世界連帯意識の育成(11項目)、外国の理解(5項目)にした。34項目4件評定法になった。得点が高いほど国際理解の程度が高いとする。

3.3 ソーシャルディスタンスと、グローバル化への態度の調査

ソーシャルディスタンスとグローバル化への態度については、プロジェクト2008「東アジアの文化とグローバルイゼーション」岩井 ほか(2011)を利用した。

ソーシャルディスタンスとは、職場関係、近隣関係、親族関係という状況になったもとの、外国人に対する抵抗感について尋ねたものである。全部で3項目、2件法で6点満点である。得点が高いほど抵抗感が高いとする。

グローバル化への態度では、ヒト・モノ・カネなどの国境を越えた往来についての考え方を訪ねたものである。全部で15項、77点満点ある。得点が高いほどグローバル化への態度は肯定的であるとする。

4. 結果と考察

4.1 日本と韓国の海外映像コンテンツの接触度の平均値

海外映像コンテンツの接触度の平均値は、日本が5.754点、韓国は6.130点であった。次に海外映像コンテンツの接触度に基づいて、対象者を高群(平均点以上)と低群(平均点未満)に群分けをした。その結果、日本の調査人数102名の中で、海外映像コンテンツの接触度の高群の人数は51名(男性20名、女性31名)、低群は51名(男性21名、女性30名)であった。韓国の調査人数253名の中で、海外映像コンテンツの接触度の高群は90名(男性25名、女性65名)、低群は163名(男性50名、女性113名)であった。

4.2 海外映像コンテンツの接触度と国際理解の関係についての分析

「海外映像コンテンツの接触度」と「国際理解の程度」の関係性を調査した。その結果、海外映像コンテンツの接触度の高群は低群よりも国際理解の程度が有意に高いという結果となった。これは、日本と韓国ともに有意差がみられた(日本($t(100) = 2.431, p < .05$)と韓国($t(251) = 4.360, p < .01$))。

この結果から、海外の映画、ドラマなどのマスメディアで提供される外国の情報や映像は、間接経験として、視聴者の国際理解の形成に寄与すると考えられる。

4.3 海外映像コンテンツの接触度と国際理解測定尺度の四つの下位尺度の関係についての分析

日本の場合、海外映像コンテンツの接触度の高群、低群と国際理解の四つの下位尺度の関係を分析した。その

結果、他国文化の理解 ($t(100)=3.065, p<.01$)、外国語の理解 ($t(100)=3.025, p<.01$) で有意差がみられた。

表1 海外映像コンテンツの接触度と国際理解の関係 (日本)

日本・国際理解測定尺度の四つの下位尺度	海外映像コンテンツの接触度	人数	平均値	標準偏差
人権の尊重	高群	51	30.76	5.584
	低群	51	29.35	6.161
他国文化の理解**	高群	51	24.82	4.448
	低群	51	22.16	4.338
世界連帯意識の育成	高群	51	29.08	5.039
	低群	51	27.67	6.163
外国語の理解**	高群	51	13.76	3.943
	低群	51	11.55	3.437

(** $p<.01$)

よって、日本の海外映像コンテンツの接触度の高群は低群よりも他国文化の理解と外国語の理解の得点が有意に高いことが示された。すなわち、海外映像コンテンツの接触度の高群が低群より他国文化と外国語の理解をしようとしていることが分かった。しかし、世界連帯意識の育成 ($t(100)=1.266, p>.05$) と人権の尊重 ($t(100)=1.213, p>.05$) では有意差がみられなかった。

表2 海外映像コンテンツの接触度と国際理解の関係 (韓国)

韓国・国際理解測定尺度の4つの下位尺度	海外映像コンテンツの接触度	人数	平均値	標準偏差
人権の尊重**	高群	90	31.322	3.1367
	低群	163	29.626	3.6936
他国文化の理解**	高群	90	26.556	2.8761
	低群	163	24.748	3.3191
世界連帯意識の育成	高群	90	32.733	4.8501
	低群	163	31.724	4.7769
外国語の理解**	高群	90	17.167	2.4689
	低群	163	15.571	2.8196

(** $p<.01$)

韓国の場合、海外映像コンテンツの接触度の高群、低群と国際理解の四つの下位尺度の関係を分析した。その結果、人権の尊重 ($t(251)=3.684, p<.01$)、他国文化の理解 ($t(251)=4.342, p<.01$)、外国語の理解 ($t(251)=4.501, p<.01$) で有意差がみられた。よって、韓国の海外映像コンテンツの接触の高い人は低い人より人権の尊重、他国文化の理解、外国語の理解が高いことが示された。しかし、世界連帯意識の育成 ($t(251)=1.600, p>.05$) には有意差が見られなかった。すなわち、韓国の対象者は日本の対象者と同様に海外映像コンテンツの接触度の高群が低群より外国語の理解と他国文化の理解をしようとしているとともに人権尊重の態度が形成されていて、他国民・他民族に対しての偏見、先入観、不信、敵意などの感情を持たないし、平等意識も持っていることが分かった。しかし、世界の人

口、資源、環境、エネルギー問題などの世界連帯への意識が低いことが分かった。

4.4 海外映像コンテンツの接触度とソーシャルディスタンスとグローバル化への態度の関係についての分析

日韓両国ともに海外の映像コンテンツの接触度の高群と低群の間でソーシャルディスタンスに有意差が見られなかった(日本 ($t(100)=.446, p>.05$) と韓国 ($t(198)=1.55, p>.05$))。その理由として、ソーシャルディスタンス(職場関係、近隣関係、親族関係)という状況に基づいて外国人と接触することについては、日本と韓国ともに海外映像コンテンツの接触にあまり影響を受けないことが示された。日本全体の平均値を見ると、日本人は海外映像コンテンツの接触に有無関わらず、ソーシャルディスタンスに対しては否定的(高得点)であった。その一方は、韓国では海外映像コンテンツの接触の有無に関わらず、ソーシャルディスタンスは肯定的(低得点)であったことが示された。

海外映像コンテンツの接触度の高群と低群の間で、グローバル化への態度に有意差はみられなかった(日本 ($t(100)=.602, p>.05$) と韓国 ($t(215)=.672, p>.05$))。

5. まとめ

本研究で、日本のA大学の大学生102名と韓国のJ大学で253名の大学生を対象に、海外の映画、ドラマ、ミュージック・ビデオをはじめとする海外の映像コンテンツの接触度の状況に基づく間接的な異文化の理解、即ち、国際理解の状況とソーシャルディスタンス、グローバル化への意識の関係について調査した。その結果、日本と韓国両国ともに海外映像コンテンツの接触度の高群は低群より国際理解測定尺度が高いという結果が出た。一方で、日韓両国ともに海外映像コンテンツの接触の高群、低群の間で、ソーシャルディスタンスとグローバル化への態度の得点の有意差は見られなかった。このことから海外映像コンテンツの接触の程度がソーシャルディスタンスやグローバル化への態度に影響を及ぼさない可能性が示唆された。

参考文献

- [1]. 鈴木佳苗・坂元章・森津太子・坂元桂・高比良美詠子・足立にれか・勝谷紀子・小林久美子・樫淵めぐみ・木村文香 (2000) 国際理解測定尺度(IUS2000)の作成および信頼性・妥当性の検討 日本教育工学会論文誌, 23, 213-226.
- [2]. 石井紀子、上田光明(編) 大阪商業大学JGSS研究センター(編集協力) (2011) データで見る東アジアの価値観—東アジア社会調査による日韓中台の比較 株式会社ナカニシヤ出版
- [3]. 鈴木佳苗・坂元章・森津太子・坂元桂・高比良美詠子・足立にれか・勝谷紀子・小林久美子・樫淵めぐみ・木村文香 (2000) 国際理解測定尺度(IUS2000)の作成および信頼性・妥当性の検討 日本教育工学会論文誌, 23, 213-226.